

「この人は、この知恵とこれらの力あるわざとを、どこで習ってきたのか。」(54節)主イエスの郷里で、イエス様を幼い頃からよく知っている人々の口から出た言葉です。

主イエスは、神の国についてお語りになり、病人を癒し、悪霊を追い出す奇跡をなさいました。故郷の人々も主イエスの噂を耳にし、実際に奇跡を体験した人もいたでしょう。そして、「この人はいったい何者か?」、という問いが彼らの頭から離れませんでした。

ヘロデの物語も、この問い、そして《力》に関わる物語です。ヘロデ王には力がありました。この地域で彼に逆らうことは死をさえ意味する、そういう力です。主イエスには、普通の人間には決してできない奇跡を行う力がありました。

「この人は大工の子ではないか。」(55節)という人々の言葉は、ナザレ村のヨセフの子、イエスという人物について説明しています。ところが主イエスは、人々の理解を超えたお方でした。誰も見たことがないこと、経験したことがないことを、主イエスは繰り返しなさいました。この郷里では、主イエスのこの力を、誰も理解することができませんでした。「そして彼らの不信仰のゆえに、そこでは力あるわざを、あまりなさらなかった。」(58節)のです。

主イエスは言葉と奇跡とによって、父なる神を示し、神の救いの御計画をお見せになりました。何も見えなかった人の目を開き、立ち上がることができなかつた人を踊り上がらせました。代々の教会は、主の奇跡の物語の中に、見えず、立ち上がることができない自分自身を重ね合わせてきました。ただ主イエスの憐れみによって、神を見上げる信仰の目を開かれ、神を誉め讃える讚美の歌を口に踊り上がってきました。

この神の子、主イエスの力に、ヘロデ王は恐れ、反発しました。かつてバプテスマのヨハネの力を恐れて牢屋に入れたヘロデ王は、しかし群衆の力を恐れてヨハネを殺すことができませんでした。しかし妻の力と、誕生日の祝いの席上で発した自分の誓約の力に屈して、とうとうバプテスマのヨハネを殺してしまったヘロデ王でした。自分の権力を握り締めて、兄弟の妻を奪い取ったような人物が、他人の評価や群衆の力に支配され、振り回されてしまっています。自分に様々な力が備わっていると思い込んでいても、実は、自分が他のものの力に支配されて

いることを、私たちもまた思い知らされます。「わたしは自分の欲する事は行わず、かえって自分の憎む事をしている」(ローマ人への手紙7章15節)と、パウロが告白している通りです。

ヘロデは、「イエスのうわさを聞いて」(1節)恐れを抱きました。主イエスの名を聞いて、というのはその言葉を聞き、なされた奇跡の業について聞いた、ということです。そして主イエスの力を恐れました。かつてバプテスマのヨハネの力を恐れたように。ヘロデ自身は力を持っていましたから、群衆よりもはるかに強く、ヨハネや主イエスの力を恐れました。自分の力を越える力を感じ取ったのです。

神のひとり子が地上に来て、神ご自身の力を発揮する時、私たちは自分自身の本当の姿を知ることになります。神の前に何も見えず、立ち上がることができない自分を知ります。やがて神の前に立つ時、そこで罪人である私たちが味わうのが絶望であり、滅びであることを思い知らされます。私たちはヘロデのように、主イエスを恐れる他ないのはずでした。

主イエスは、この恐れを取り除くために来て下さった救い主です。その力を、私たちが滅びから解放するためにお使い下さったお方です。誰も理解せず、恐れる他なかつた神の国の力が、私たちの罪を赦し、命を与えるために使われしました。神を拒み、恐れて自分の人生から排除しようとする者さえ見捨てずに、救い出して下さいました。

神の力を、主イエスは私たちを救い出し、生かすため、あの十字架の上に留まり続けるという仕方でお使いになりました。無から世界を造り、支配しておられる神の力を、やがて聖霊が注がれた時、弟子たちも知るようになりました。それまで、謎に満ちた理解不能な力を恐れた者を、主イエスのうわさを聞いてその力を恐れる者を、聖霊は招き寄せ、恐れから解放し、命の道へと導いて下さるのです。

神の救いの力が、私たちの救いのために使われしました。今ここに、私たちが集められ、御言葉を聞き、主を誉め讃えているのは、私たちひとりひとりに神のこの力が働いているからです。神の愛が、私たちを捉えています。どんなものも、この愛の力から私たちを引き離すことはできないのです。

(記 岡村 恒)